

大堀皓平 提出 学位申請論文（課程博士）

『石材分析に基づく沖縄先史研究』 審査要旨

博士論文の要旨

沖縄本島を対象とする琉球列島地域の先史時代における石器の石材利用の有様を論ずるものである。序章にはじまり、第I章から第IV章そして終章の構成をとる。

序章では、化石人骨の出土例がありながら人工品が未発見の旧石器文化に触れる。縄文時代では、その開幕が遅れ草創期相当の期間は無人状態であった可能性がある。縄文前期からようやく本州と肩を並べる文化が認められ、弥生時代以降の歴史へと続く。一方、先島諸島においては沖縄本島を中心に形成された中部文化圏とは不即不離の関係を保ちながらも、むしろ台湾、フィリッピン方面との類似性も示す、独自の南部文化圏を形成することを指摘する。現在、最も古い土器は、9,000年前相当のウフニクガマである。爪形文土器に先行するが、その系譜を本州縄文土器に直接見出すことは出来ない。はっきりするのは九州西海岸につながる前期の曾畑式、轟式である。後期にも伊波式土器に伴う九州伝来の市来式土器があり、縄文文化との関係は、土器口縁の4つの突起などに表れている。さらに、ヒスイ・黒曜石を保有するなど物質文化だけではなく、社会的・文化的あるいは精神文化などにも明瞭に反映されていることがわかる。その一方で、ジュゴン肩甲骨製の蝶形骨製品に代表されるがごとき、独自性をもつと

ころに沖縄先史文化の主体性をみてとる。

第Ⅰ章では、本論への第一歩として、沖縄本島地域の石器研究の歴史を辿り、やがて今日注目されるに至った石材研究の現状を概括し、問題の所在と、研究の方向性を示す。つまり、これまでの石器研究が最も基礎的な集成作業に留まっていた実情を踏まえ、今後は社会、文化論に踏み込む必要を指摘する。とくに石器材料としての石材がもつ環境資源としての意味を重視することによって、ヒトが自然環境ない社会環境に適応してゆく具体的な戦略の考察を推し進めてゆく方針を明らかにする。そのためには、石材の産地を捉えた上で、石材獲得の行動領域や石材選択を石材獲得戦略、石器製作技術にかかわる石材消費戦略、そして石器組成を資源から生産される石器のラインナップという3本の柱を方法論に据えようとするのである。その上で、石器の種類、即ち石斧・敲石・凹石・磨石・石皿・石鏃・スクレイパー・石匙・小型扁平利器・石錐・石錘・砥石の検討を進める。

そうした各種石器について、羅列的にみるのではなく大工原豊が提唱する、打製石器系列、磨製石器系列、礫石器系列の3つに大別して器種同士相互の関係性を論ずる。前二者が主要であり、とくに単独型磨製石器系列は本土の石器群とは異なり当該地に特徴的であるとする。

また、石器の時期を追っての変化を辿り、第Ⅰ期爪形文系期には、後の時期にはみられない局部磨製石斧の特徴的存在を論ずる。第Ⅱ期には、縄文文化に起源をもつ複合型打製石器系列と複合型磨製石器系列、第Ⅲ期には縄文特有の石匙、第Ⅳ期には縄文系の石器が姿を消して粗製系統中心、第Ⅴ期は先史型が衰退して砥石主体へと変遷するこ

とを明らかにする。

この時期区分において、とくに①第Ⅰ～Ⅱ期、②第Ⅲ期～Ⅳ期、③第Ⅳ期～Ⅴ期の3つに石器様式の画期が認められるとする。一方、②では鉄器の導入にもかかわり、適応戦略あるいは縄文社会の終焉に伴う社会構造の変化を想定する。①における爪形文系と条痕文系の石器群に連続性が殆どなく、別系統と解釈する。

第Ⅱ章は、前章で提起した第Ⅰ期における野国型石斧とその製作の石材獲得戦略を前琉球縄文式と設定し、縄文系石器と直接的な関係がなく、本州の縄文文化本体とは区別されるべきであると主張する。しかし、これが爪形文系期で途絶えて、条痕文系期には継承されないことを指摘する。つまり、楕円礫を素材とする全面研磨の磨製石斧の製作、複合型打製石斧系列にみられる押圧剥離技術の導入という大変化をみとめる。これを琉球縄文式と認定するのである。

第Ⅲ章では、磨製石斧に焦点をあて、縄文から弥生併行期への展開の動態を検討する。つまり、精製と粗製を保有する縄文から「粗造の感」のある弥生併行期を、単なる「移行」ではなく、「動態」として理解されるべきだとする。また特徴的な貝斧のうち、沖縄本島のそれは、磨製石斧の材質不足を補う代替による所産とする。そして東南アジアに由来する系譜の可能性を辿ることのできる先島諸島の貝斧と区別する。

さらに、磨製石斧における石材運用の実際を通して、時期的変遷を概観する。とくに緑色岩系が選択されることについて、「理想の石材」を目指しながらも、実際は「現実の選択」という実用重視の戦略

があったとする。

第Ⅳ章では、石材獲得戦略をアンチの上貝塚の分析に基づいて議論する。もともと遺跡が所在する瀬底島には石材がほとんどないのであるが、特に遺跡近隣の石材と遠方の石材を区別して戦略の内容を明らかにしてアンチの上貝塚の盛衰を南島産貝の交易の舞台としての役割を演じていた可能性を示唆する。

終章では、石材分析による沖縄先史社会を総括する。まず第一に、石器様式の変化を前琉球縄文式に始まり、琉球縄文式を経て琉球様式からグスク式への変遷を結論づける。第二に、それら新旧の石器様式について、石材獲得消費戦略が、前琉球縄文式における特異な獲得消費戦略の中での野国型石斧の緑色千枚岩利用を明らかにする。そして野国技法が高いリスク低減型石材獲得消費戦略であったとする。第三に、琉球縄文式では、複合型打製石器系列とガラス質タイプ、複合型磨製石器系列と層理構造タイプ、粗粒粘質タイプ、礫石器系列と中粒タイプとの関係は強固な結びつきを見出す。これには、消費的なコストが必要とされ、コスト投下型と評価する。第四に、続琉球縄文式ではコスト低減型の石材獲得消費戦略であったとする。

弥生時代併行期から古代併行期では、土器口縁突起の消滅、ヒスイ製品の消滅など縄文世界観が衰退し、南島産貝斧などへの変化を背景として琉球縄文式の再編が続琉球縄文式に変貌したとする歴史を読みとるのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、沖縄本島とりわけ中間部に形成された中部文化圏の先史時代を対象とする。

沖縄本島を中心とする南西諸島は、大和言葉の文化圏である。言葉は文化であり、文化は言葉に表象される。しかし、日本列島文化はけっして一枚岩ではなく、藤本強の提唱するところの北海道「北の文化」と並んで、文字通り「南の文化」としての主体性を示していながら本州「中の文化」と相互に関係を維持する。その始まりは、すでに縄文時代に遡る。

琉球列島の考古学的研究は鳥居龍蔵によって拓かれたが、今日に至るまで決して活発とは云えない。まず第一に日本列島から大きく隔てて位置するという地理的環境もさることながら、研究者も少ないことにも起因する。ようやく近年、若い世代が育ちつつあり、地域的研究とともに、日本列島の「中の文化」とのかかわりについても、いくつかの視点に基づく議論がみられるようになった。本論はそうした風潮の中で、独自の方法論で取り組み成果を示している。

まず、南西諸島あるいは、琉球列島は3つの文化圏に区分するのは国分直一以来の基本的な観方であり、論者もこれに拠って立つ。文化はさまざまな要素の複合体である。その中の一要素、石器と石材に焦点を当てる。

「南の文化」の開幕は、旧石器時代とみられ、化石人骨の出土は確

実であるが、何故か石器や骨角器などの人工品は未発見である。その理由は依然として不明であり、今後の大きな課題として残されている。文化の主体者行方不明状態のまま縄文時代草創期相当まで続く。

縄文早期併行の爪形文系土器が改めて歴史舞台への明瞭な登場である。土器文様は九州方面の爪形文と共通するが、2,000年以上も新しく直接的な系譜は認め難い。それ故に、その由来は不明であり、未解明である。具体的なつながりが見られないので、縄文文化、縄文土器と具体的に関係づけることは出来ないが、縄文文化とは無縁であると速断するわけにはいかない。さりとて、台湾方面、中国大陸側にも系譜は求められない。まさに孤立状態であり、論者は明確な発言を控えている。けれども、その後九州方面の前期曾畑式・轟式が続いている事実は、その伝播のルートがそれ以前にすでに存在していた可能性を示唆するものである。土器は、粘土の入手から成形・焼成・使用・維持管理など技術的要素のみならず、社会的・文化的な要素の複数の総合体である。そうした事物を外部からの一切の影響あるいは刺激抜きで独自に発見、発明することは至難である。つまり、沖縄本島に登場した土器は、独自に発明された可能性は極めて低いとみなさざるを得ない。ましてや、沖縄の土器出現期に先行して、一定の土器文化を軌道に乗せていた九州方面との関係は実際的とみられるのである。したがって、具体的な文様の共通性を求めて、不発に終わったからとしても、無縁であったとするのではなく、あるいはあいまいなままにするのではなく、むしろ積極的に他の土器との関係を予測すべきであり、論者のより大局的な観方が求められるところである。

ところで、石器石材の研究において、対象地としての沖縄が島であることは、具体的な解明に有利な条件があると認めることから考察を進めるのは妥当である。つまり、第一に、沖縄島内部調達と外部調達を区別し、さらに内部における石材産地が限定され、遺跡の近隣と遠隔地からの入手を区別する視点によって具体的叙述を成功させている。

また石材は、その石器の機能・用途に直接かかわる物理的性質だけではなく、緑色岩系が選択されるところに「理想の石材」という概念を用意して磨製石斧の「現実の選択」との関係をみてとっており、その独自性は評価される。

さらに、精製と粗製を問題とする中で単なる技術上の認定とは別に、見た目あるいは製作者の「設計図」（範型）に対して忠実かつ丁寧に仕上げる類と、結果として「粗造の感」を示す類とを対比するところに具体的な縄文人像につながるイメージが息づいている。論者の人間に対する視線に温もりが生まれている。ここに考古学に忠実にあろうとしてモノにだけ集中して人間性から遊離してしまいがちな欠点を免れている。

なお、石器は、言うまでもなく、文化あるいは物質文化に限ってみても、文化複合体を構成する一要素である。要素には主要なもの、従属的なものなどさまざまある。たとえばしばしば並び称される土器と比べても、文化複合体の中での要素としてはその歴史的意義は低いものである。この点を認識することが必要である。つまり、石器研究には可能性とともに、限界性があるという事実を正しく認識することに

よって、より着実な成果を実現できるのである。換言すれば論者には石器研究への手放しの可能性を期待するかのごとき気配が見え隠れしている。改めてその限界性を踏まえることによって、はじめてさらなるそれ相応の成果が獲得できるはずである。

ところで本論の重要なテーマとして、石器の種類とその組合せおよび石材との関係において縄文から弥生そして古代移行に至る時期的な変化に、前琉球縄文式・琉球縄文式・続琉球縄文式に大別して、歴史的な評価を与えているのは独創的であり、高く評価される。総じて、これまでも、沖縄の石器についての研究があったことは、論者が研究史で詳細に吟味している通りである。しかしそれらは石器の形態の検討であり、それ以上あるいは以外のものではなかった。そうした状況を打破し、乗り越えるものが本論文であり、石器材料としての石材に注目し、その産地を同定し、獲得戦略、消費戦略の視点を明確にして議論するところに新しい方法の真骨頂があり、独創性が発揮されている。この姿勢によって新しい地平が拓かれ、今後の展開が期待される。本論が高く評価されるべき所以である。

よって本論文提出者の大堀皓平は博士（歴史学）の学位を授与される資格を有するものと認められる。

平成23年 2月18日

主査 國學院大學大学院客員教授 小 林 達 雄 ㊟

副査 國 學 院 大 學 准 教 授 谷 口 康 浩 ㊟

副査 琉 球 大 学 教 授 池 田 榮 史 ㊟